

No. 1174

モントリオールに 日の丸を

228
あき
あき

7月7日、第21回オリンピック・モントリオール大会に参加する日本選手団の結団式が皇太子ご夫妻をお迎えして、東京・代々木の国立第二体育館で行なわれた。

役員選手含めて総勢 268 名。海外派遣のオリンピック日本選手団としては史上最大の規模となった。今回の結団式は模範演技を含め初の有料公開。団旗の授与、皇太子殿下の激励のお言葉、河野団長の挨拶、加藤次男主将の決意表明の後、女子バスケット、男女体操など模範演技が披露された。様々な問題と矛盾をかかえたオリンピック。今年も台湾の呼称をめぐるオリンピックの理念は更に失なわれようとしている。こうしたなかで7月8日決意を新たに選手団の第一陣がモントリオールへ向って出発した。

夏をつくる

— 東京・鹿骨 —

252
207

東京、浅草。夏の訪れを告げる恒例の「ほうずき市」が7月9日、10日両日浅草寺で開れた。

広い境内は450軒を越すほうずき店が建ち、涼を求める人々で埋った、店さきには朱色に染ったたくさんのほうずきが飾られイキな若者の威勢のよいかげ声で売られていった。

この「ほうずき市」に欠かせないのが日本人独得の情緒が生みだした、江戸風鈴。歴史は意外に新しく、明治末期にガラス細工師篠原又平さんが、金魚バチをひっくりかえす逆転の発想からつくり出したものだという。江戸川区鹿骨、ここが江戸風鈴のふるさとである。

涼しさを呼ぶ風鈴も生まれたところは1200C°のしゃく熱の炉。数少なくなった手造りの風鈴、その伝統を守っている二代目篠原健治さん、父又平さんの跡を継ぎトモザオを吹きつけて27年になる。風鈴は溶かされたガラスの液をトモザオにつけ、息を吹き込み、足と腰のリズムで素早く造っていく篠原さんの顔は庶民に涼しさを送るため、そして生活をかけたものだという。出来上がったガラス玉はヤットコで整理され、内側からきれいに着色されていく。

描かれる金魚の絵も、父、又平さんの時代から受け継がれているものである。篠原さんは「ガラスを売っているんじゃない、音を売っている」この「ほうずき市」が終ると東京にも本格的な長い夏がやってくる。

7/6 207